

## 当たり前の世界へ

高三

「LGBTQ+」は性的マイノリティの総称の一つであり、レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー・クエスチョニング・クィアの頭文字を取ったものだ。+は特定のセクシュアリティを表している訳ではなく、他にも様々なセクシュアリティがあるという意味である。

私は昔から白が好きだったがランドセルや部屋の色はピンクばかりだった。しかしそれを私は「そういうもの」としてまったく気にしなかった。中学生になって私は「LGBTQ+」について知り、なぜ私のランドセルや部屋はピンクばかりなのだろうかと考え、「自分は女性だから」という結論に至った。そこで初めて私は自分が性に対して「普通」という名の偏見をもっていることに気がついた。

世の中は、いまだに色によって性差を表すことが多くあると感じられる。日曜日の朝に放送されている男児、女児向けアニメを見たことがあるだ

ろうか。前者の主人公は「レッド」、後者の主人公は「ピンク」であるのがもはや常識となっている。ここで考えてみてほしい。先程ランドセルの話をしたが、男の子は黒か青、女の子は赤かピンクと決まっているように昔は感じられた。赤を選ばない男の子が「男の子なんだから」と黒や青を選びたい男の子が「赤は女の子の色」だといった誰が決めたのか。それをふと疑問に思った私すらも「自分が女性だから」と選ばれた色に疑問を抱かなかつたのだから、親がどうこういう話ではないのだろう。

中学生の頃のクラスメイトにピンクが好きなお子があった。彼はよく蛍光ピンクの物を所持しており、最初こそ周りに「男なのに」と言われていたが、いつしか何も言われなくなり、最終的には仲のよい男子たちは何らかのピンクの物を所持するようになった。私はなぜあれだけ馬鹿にしていたピンクの物を持つのか彼らに聞いてみたことがある。答えは「性別に色が関係ないことに気が付いた」だった。私はそれを聞いて、世の中に必要なのはこのような意識ではないかと思った。

我々子どものもつ先入観というのは親から伝

わっている場合が多いが、その親もかつては子であり、無意識に先入観をもってしまっているのだ。長い時を経て世間に浸透した先入観はもはや常識となり、性を「普通」に縛りつけた。しかし、それを突破する糸口は簡単などころにあったのだ。一度立ち止まって考えてみればよいのだ。色に性別など最初から関係なく、好きな色を持つてばいいのだと気が付くことは、それほど難しいことではないだろう。

さて、色と性について私の考えを述べたが、それだけではない。色というのは既に性にこだわらず、各々が好きなようにすればよいと世間ではなりつつある。だが「LGBTQ+」にはまだ大きな壁があると私は考えている。それは「恋愛」だ。「恋愛」と調べると、「男女間の恋、異性間の関係の一つ」であるなどが出る。一方、「愛」と調べると、「愛おしむ、愛でる」といった言葉が出てくる。恋愛と愛の違いは同性や家族間でも適用されるか、されないかということなのだろうか。では同性が恋愛対象になるレズビアンやゲイのもつ愛は恋愛にならないというのか。それは違うと私は強く思う。

そもそも人が異性を愛し、結婚して子を成すのは生物としての本能なのかもしれない。しかしそれだけではないだろう。本能による行動かもしれないが、そこには確かな相手への想いがあり、その想いこそが生物の尊いものではないか。同性であれば子を成すのは難しいかもしれない。ただよく考えてほしい。子を成すためにだけに恋愛をする時代など、とうに過ぎていくのだ。

日本ではいまだにこのことについて地域での取り組みはあれど、法で保護されることなく、他の国に比べて厳しい状況である。法で護られないのなら一人一人の考え方を改める他ないだろう。

今回書いた人権作文も「LGBTQ+」への差別や偏見を解決する糸口になると思っっている。微力ではあるが、様々な形で私も訴え続けていきたい。